



小椋

KUMIKO OGURA

久美子

コミュニケーションが いちばん重要

私が現役引退を発表したのは2010年の1月。でも、その前年から、公式戦には一度も出ていないので、自分の中では2009年を選手引退の年と刻んでいます。

引退後、いろんなことにチャレンジさせていただきましたが、最も力を入れたのはバドミントンを通して子どもたちにスポーツの楽しさを伝える活動です。これは選手時代からやりたいと考えてきたことなので、とても楽しく続けています。教えるレベルはさまざまで、大会で活躍する選手の強化だけでなく、初めてラケットを握る子どもが多く参加する親子バドミントン教室で指導することもあります。

どんな子どもが相手でも、とにかくバドミントンやスポーツの楽しさを知ってもらおうことを、いちばん大切にしています。スポーツというと、とかく勝敗にこだわるイメージがついて回りますが、勝ち負けの前に、純粹にシャトルを打つ楽しさを知ってもらいたいです。私自身、バドミントンを始めたのは強豪クラブチームなどではなく地元のスポート少年団で、毎回仲間と練習することが楽しくて仕方ありませんでした。楽しく続けているうちに、バドミントンが大好きになって、だんだん目標が大きくなっていき、選手

として活躍できるまでに成長できました。ですから楽しいと思えることを大事にしています。

親子教室では、家庭によってコミュニケーションがさまざまで、教えているほうも面白いんですよ。うまくできないお子さんに親御さんが丁寧に教えていたり、逆に失敗したお父さんにお子さんがダメ出しをしていたり。形はいろいろですが、バドミントンを通して親子のコミュニケーションが深まってくのが感じられます。

私はダブルスの経験が長いので、余計にそういうところが目に入ってくるのかもしれないが、たとえばぶつかってもお互いが意思表示しながらコミュニケーションをとることが大事です。ダブルスでは、二人そろって絶対調ということはあまりありません。その中でどうやってお互いを補いながらゲームを作るかが重要なんです。そのためにはゲームの中で常にコミュニケーションを取る必要があります。若い頃は自分が勝つことに真剣になりすぎて、ついキツい言葉を使ってしまったこともありましたが、マイナスイメージを投げかけた結果いい結果になることは少ないですね。経験を積んでからは、ダメ出しではなく伝えるべきことをしっかり言葉で表しながら、どうしたらよいかの選択肢を提供し、二人で解決策を見いだせるような言い方を心掛けるようになったことで強くなっていきました。

バドミントンの魅力を 広く伝えていきたい

教室には幼稚園児くらいの小さい子どもから70歳くらいまで幅広い年齢層の方たちが参加してくださっています。バドミントンのいいところは年齢や性別は違ってもラケットやシャトルなど道具だけでなくコートやネットの高さも同じなので、どんな相手とも等しく競い合うことができるということです。同じ条件で競い合うと、その中でもコミュニケーションが生まれます。スポーツは合法的な戦争と例えられることもあります。勝敗はあっても、相手に対する憎しみはありません。全力で勝敗を競った後で対戦相手との間に絆のようなものが生まれるのもスポーツの魅力の一つだと思います。

バドミントンという競技の魅力は、やはり瞬間的なスピードです。スピーディーなラリーの中で、チャンスを見逃さずにポイントを取るためには一瞬の判断力が求められます。それも、ただ相手のミスを待っているのでは勝てませんから、1秒にも満たない瞬間で3手先くらいを読み、自分から相手のスキを作り出す必要がある。ある種、騙し合いのような駆け引きをしなければなりません。そこで求められるのは、全体の状況を読む洞察力です。スピードの速い展開の中でいかに頭を使えるかが、勝敗のカギだといえます。

一人じゃない

Special edition "PASS THE BATON"

"オグシオ"として知られる潮田玲子さんとのコンビで、北京オリンピック出場や全日本選手権5連覇をはじめとする輝かしい成績を挙げ、スポーツファンならずとも、いまなお多くの人の記憶に残す小椋久美子さん。選手を引退してからは、後進の指導とともにバドミントンの魅力を広く伝える活動に注力している小椋さんがバドミントンを通じて伝えたいこと、そしてオリンピックに対する思いとは？

ですから、バドミントンは身体能力が高いだけでも、テクニクがあるだけでも勝てないんです。スピーディーなシャトルの動きに反応しながら、クイックに判断し、先を見通し、相手の裏をかく力。積み重ねてきた経験も求められま
すし、何よりメンタルが強くないとい
けません。気持ちの状態はシャトルに
現れますから、弱気になっていると数ミ
リの差でシャトルがネットを越えな
かったりする。風など周りの環境にも
影響されますから、それに動じない強

さも必要なんです。

もちろん、それは大会に出るような
レベルになってからの話かもしれませ
んが、そういう駆け引きや勝負の面白
さも、少しでも子どもたちに味わって
もらえればと思っています。勝ち負け
にこだわらなくてもいいです。勝てな
いでも、でも勝敗を競う中で、ときに
は負けて挫折を味わえるのもスポー
ツの良いところではないでしょうか。
特に子どもたちにとっては、スポー
ツで負けたり壁にぶつかったりして、そ

こから立ち上がるという経験が、その
後の社会で出会うであろう挫折を乗
り越えていく力になると思うんです。
そうした体験ができることも、子ども
たちの成長につながると信じて活動
しています。

体が動く限り子どもたちと コートに立ち続けたい

子どもたちを指導する際、もうひと
つ心掛けていることは、参加者全員と

シャトルを打つことです。ときには参
加者が100人を超えることもあり
ますが、それでもコートに入って、たと
え時間が短くて一人とのラリーが数
球になったとしても、一人ひとり全員
とシャトルを打つようにしています。
日本代表を経験した立場として、それ
が一番子どもたちの記憶に残り、今後
につながると思えているからです。
実は私も、子どもの頃に参加した教
室で元日本代表の陣内貴美子さんと
シャトルを打つことがあります。そ
の記憶はずっと鮮明に残っていて、競
技を続けていくうえで大きな力になっ
ていました。教室では技術的な指導を
することもありますが、正直なところ、
その時の細かい指導内容を子どもたち
が全部覚えていくわけではない
と思っています。でも、顔を知っている
選手と実際にシャトルを打ったという
体験は記憶に残っているものです。そ
のためにも、私は体力の続く限りコー
トに立ちたいと思っています。今のと
ころ少なくとも50歳になってもコート
に立っていることが目標ですね。

オリンピックは 競技者だけのものではない

2020年には東京でオリンピック
があります。私自身はオリンピックで
メダルを獲ることができず、引退後も

ずっと引きずっていました。プロフィール
にも「元日本代表」とだけ入れて、オリ
ンピックという文言は封印していたく
らいです。ただ、2012年にレポー
ターとしてロンドン五輪に行かせてい
ただいた時、多くの観客と共にマラソ
ン競技が始まるのを待ちながらロン
ドンの街を見て、ふと「こんな舞台で走
れるなんて素敵だな」と思ったんです。
その瞬間に、私もメダルという結果は
残せなかったけれど、素晴らしい経験
をさせてもらったんだ、幸せなこと
だったんだなと自分のオリンピックに
対する負の記憶を払拭できたんです。

選手は、勝敗やメダルという結果に
こだわってしまいがちですが、それまで
積み上げてきたものを出し切れば、見
ている人たちはきっと心を動かされま
す。結果はどうあれ、全力を尽くせば、
そのドラマは応援してくれている人た
ちに伝わりますし、その後もずっと応
援してくださるんです。北京から帰っ
て来た時の私は、そのことがわかってい
なかつたんですね。2年後の東京を目
指している選手たちは、やってきたこ
とを悔いなく出し切ることに集中して
ほしい。勝敗やメダルはそこに付いて
くるものだと思います。

オリンピックが地元で開催されること
は、選手だけでなく見る側にとっても
大きな意味があると思います。世界中
から集まった代表選手によるレベルの

高い競い合いを生で見ることができ
るわけですから、一生心に残るものになる
はずです。カメラや活字を通してでは
感じられない選手たちの息遣いや会場
の雰囲気など、できるだけ多くのもの
を体感してもらいたいですね。今までよ
く知らなかった競技でも、観戦するた
めにルールを調べたり選手の名前を
知ったりするだけで身近に感じられま
すし、面白さも変わってくるはずです。

また、これはレポーターとして行っ
たリオ五輪で感じたことなのですが、オ
リンピックという大舞台は想像以上に
多くの人たちによって支えられています。
会場だけでなく、選手村のセキュリ
ティや試合後の清掃をする人たちなど、
ほとんんどがボランティアで、本当に多
くの人たちが関わっています。そうい
う人たちの尽力や表情などを見ている
と、オリンピックは競技者だけのもの
ではないということを感じます。選
手ががんばるだけでは、その大会は成
功しません。見ている人たち、そしてサ
ポートしている人たちもそろって、東
京で開催できてよかったと言えるよ
うな大会にしたいですね。そのためにも、
子どもたちにスポーツの魅力を伝
える活動はもちろん、バドミントンの
面白さや今の選手たちの人となりを知
ってもらうために、レポーターや解説
の仕事など、私にできることを精一杯
やっていこうと思っています。

一人じゃない

Special edition "PASS THE BATON"

スポーツインストラクター
小椋 久美子(おぐら くみこ)

1983年7月5日生まれ。三重県出身。大阪府の四天王寺高校
卒業後、2002年三洋電機に入社し、バドミントン部に所属。
潮田玲子との女子ダブルスペア「オグシオ」として多くの大
会で活躍。全日本総合バドミントン選手権大会では2002
年に女子シングルス優勝。2004年から2008年まで女子ダ
ブルス5連覇を果たす。2008年北京オリンピック女子ダ
ブルス5位入賞。2010年に現役引退を発表し、その後は全
国で子どもたちにバドミントンを教える活動に従事する
ほか、多くの大会で解説者としても活躍している。